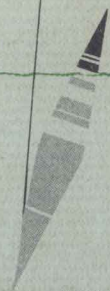
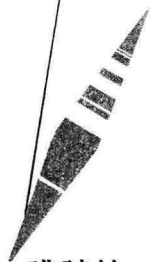


緑の水平線 林房雄



講談社

緑の水平線 / 林房雄



講談社

みどり すい へい せん
緑 の 水 平 線

著者の了
解により
検印廃止

昭和39年 3月30日 第1刷発行
昭和39年 6月20日 第3刷発行

著 者 はやし ふき お
 林 房 雄

¥ 420 発 行 者 野 間 省 一

東京都文京区武島町 22
印 刷 所 慶昌堂印刷株式会社

発行所 東京都文京区 株式 講 談 社
 音羽町 3-19 会社
電話 東京 (942) 1111 (大代表) 振替 東京 (3930)

落丁・乱丁はお取りかえいたします。 (大進堂製本)

© Fusao Hayashi 1964

目

次

海 と 春 風	歌と並木道	雪と梅の花	朱 と 銀	岬と灯台	影と微笑	お砂糖と塩	風と夕月	美女と賭	火山と湖	花と蜜蜂	魚と探偵	老人と海
------------------	-------	-------	-------------	------	------	-------	------	------	------	------	------	------

140	123	104	91	80	69	62	49	36	28	24	15	7
-----	-----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---

雨と電波	151
海のレストラン	161
巨魚と戦う	167
海のバベキユー	181
アパートの裏窓	187
イシナギ釣談	194
港	204
海の鳥	219
メント・モリ	227
白い船室	235
霧の湖	242
愚者の楽園	249

装
幀

$\left(\begin{smallmatrix} D \\ D \end{smallmatrix}\right)$ $\left(\begin{smallmatrix} A \\ D \end{smallmatrix}\right)$

坂 沢

野 田

重

豊 隆

緑
の
水
平
線

老人と海

「服装をかまわなくなるのも、老化現象の一つでしょ」

次女の友子が言う。まだ高校三年生だが、言うことは一人前だ。

「とてもおしゃれで、スマートな釣服をデパートで見たような気がするんだけれど」

ボロボロというほどではないが、灰色でシミだらけの釣服を着こんで、ヒゲもあたらずに出かけて行く父親の野暮ったい姿が気になるらしい。

白井さんは苦笑しながら、

「これでいいんだ。カクテル・パーティに行くのじゃないよ。派手な服を着たからといって、魚はかかってくれないね」

「老人と海？」

「いやな子だな。そんなにぼくを老人あつかいにしたいのか」

「映画の話よ」

首をちぢめて、友子は逃げた。チョロリと舌を出すことだけはやめたのは、それだけ大人になったのだろう。

『老人と海』の映画は、白井さんも見た。原作も読んでいた。

「あの映画は本職の漁師の物語だよ」いつの間にか大人びて色っぽくさえた娘の姿を、食卓越しに眺めながら、

「ぼくは釣師だ、漁師じゃない」

「どこがちがうの？」

「職業と遊びのちがいだ」

「でも、獲物はもって帰るじゃないの。友子、パパの釣ってきたお魚たべるの楽しみよ」

「ぼくは獲物は売らない。『老人と海』の漁師みたいに、あんなバカでかい化物みたいな魚は絶対に狙わないし……」

「今日もベラとカワハギでしょ」

「冷かしたつもりか？」

「ううん、友子、小魚が好きなのよ。味がこまやかでしょ。パパの獲物がいつもフレッシュなので、魚屋のお店の前は、生臭くて通れない」

台所から、母親の鈴代さんの声がとんできた。

「友子、何をおしゃべりしているの。そろそろバスの時間ですよ。早く、紅茶を魔法ビンにつめて、……タバコとマッチはさしあげましたね？」

「はい！ ほんとね、ママ。友子、パパのお供して、釣に行きたいんだ」

白井さんは目をまるくして、

「おいおい、本気かい？」

「本気よ、パパの娘なんだから」

白井さんは腕時計を見た。バスが出るまでには、まだ二

十分ほどある。

「最近ほ女性のアングラーも増えたようだ」

「素敵な釣服を着た姿が週刊誌の表紙にも出るようになってたわ。スキー服よりもしゃれてんの」

「服では魚は釣れません」

「ううん、服はあきらめるから、つれてってよ、パパ！」

「勇ましい娘だよ、お前さんは」白井さんはうれしそうに言った。「娘といっしょに釣るのもわるくないな。だが、

今日は日曜日じゃないし……」

「ううん、もちろん、休みの日でもいいのよ」

「ああ、いつか、あたたかくて風のない日曜日にね」

「だめですよ、あなた！」

台所から、甲だかい声がとび出してきた。「おだてると、この子、ほんとに行きますよ」

友子は声のほうに口をとがらせて、

「おだてられなくても、行きたいのよ、ママ！」

ママの鈴代さんはエプロン姿で、弁当の包みを持って台所から出てきた。はしゃいでいる友子をにらみつけるようにして、

「行けるのですか！」

「なぜ、行けないの、ママ？」

「あんた、オシッコをどうするつもり？ 八時間も船の中にいるのよ」

「わあ、いやだ！」

「それ、ごらんなさい。わたしも知らずにお供して、一度

でこりてしまったのよ。死ぬ思いでしたよ、ほんとに！」

だが、娘はひきさがらなかつた。

「いいのよ。友子、考える」

「考える？」

「オシッコをがまんする方法よ。こわくないわ！」

強がってみせたが、この論争はどうやら母親の勝ちしかつた。

「なんて、あきれた子なんでしょう。あなたは女よ。男の子だと思っているのですか！」

友子はシュンとなって、父親の釣服姿を未練がましくふりかえりながら、勉強部屋にひっこんでしまった。

白井さんは、用意の釣道具と妻の手づくりの弁当を肩にして、バスに間に合うために、家の前の坂道を下って行った。

鳥の胸毛をならべたような朝の雲。生れたばかりの太陽が北寄りの微風の中で笑っている。この風が正午前に南にかわれば、絶好の釣日和になる。

期待が胸をくすぐる。釣の一日の最も楽しい瞬間は今かもしれない。

海の上に出て、釣糸をおろせば、釣には釣の苦労がある。釣れぬいらだち、背骨と腰のいたみ、季節の暑さ寒さ、強すぎる風と波……。釣師を有頂天にする大釣などというものは、三年に一度ぐらいしかないと、さんざん思い知らされていながら、朝ともなれば、新しい期待に胸をふくらませて出かけて行く。

それが釣師なのだ。

*

橋のたもとへのバスの停留所に人影が見える。早朝出勤の勤人たちの群れだ。

白井さんは歩調をゆるめ、肩の釣道具をゆりあげながら、自分の考えにふける。

（人生の楽しみというものは、すべて期待の中であって、現実にはない）

そして、ひとりで苦笑する。

（年だな。おれもいつのまにか、こんな考えかたしかでない年齢になってしまったのだ。……明治生れの満五十五歳。孫もある。血圧も適当に高くなった。老人用の試用薬がダイレクト・メールで盛んに送りつけられてくる。適応症は根気のなさ、忘れっぽさ、怒りやすいこと、映画を見て意味もなく涙をながすこと、性欲の減退または消滅、世事万端のおつきあいが面倒くさく、おつくうになつてきたこと——なにもかもあてはまる。……おやつ、いやなやつに会ったぞ。また、あいつだ！）

バスの停留所の一群の中の、黒っぽいダスター・コートを着た会社員風の男が白井さんをふりかえって、ニヤリと笑った。

「やあ、またお出かけですか。お宅は毎日連休で結構ですな！」

まわりの人に聞えよがしの大声であった。

お隣の角田君だ。お隣といっても、高い崖をへだてて、その崖下の家に一年ほど前にひっこしてきて、横浜の電機会社だとかに通っている。家が日蔭の崖下にあるせいでもなからうが、なにかにつけて、白井さん一家に露骨な反感をしめす。生れつき皮肉な性質なのか、それとも白井さんの小説家という職業が派手に見えて気に入らないのか、引越しのあいさつにやっけてきて、いきなり、「お宅とは格がちがいますから、御近所づきあいはおことわりしますが、まあ、よろしく」と言った。

だから、こっちも御遠慮中上げているつもりなのに、やれ犬がほえすぎるの、やれ十時以後のタクシーは門まで乗りつけてもらいたくないのと文句のつけどおしで、崖くずれで道が埋まった台風の責任まで、なすりつけてくる上に、道で会うたびに、ニヤリと黒い歯をむきだして、二こと三こと下手な皮肉めいたことを言う。今朝も、それだった。

白井さんは毎度のことだと無視したが、やっばり気持はよくない。毎日連休どころか、釣に出る日には、午前三時に起きて、原稿の日課をすませる。書きだめがなければ釣にも出れない結構な御身分なのだ。

バスが来た。

白井さんは行列のいちばんうしろにならび、ゆっくりと乗りこんだ。角田君からなるべく離れた場所にすわるつもりだったのだが、相手はそうはさせなかつた。

白井さんの前に立ちはだかつて、

「今日は、うちの社長も久里浜に出かけると言っていましたよ。ごいっしょでしょう。結構ですな。うらやましいですよ」

白井さんは角田君の会社の名前を知らない。

「だれでしょうね、きみの社長というの？」

「いやだなあ、朝っぱらから、おとぼけになるんですか。

同じ鎌倉の釣仲間じゃないですか」

「釣仲間はたくさんいるよ。名前はなんというの？」

「もういいですよ。知らないとおっしゃるのなら、それも結構です。特権階級は特権階級同士でおつきあいなさい。社長に会ったら、角田という下っぱ社員が大漁を祈っていると云ってください」

ぶいと前のほうに行ってしまった。ひとかどの皮肉を言ったつもりなのだろう。

釣の苦勞はバスの中から始まる、とだれかが書いていたが、そのとおりだ。この時刻の乗客はたいがい早朝出勤の社員と工員諸君だ。若い女事務員の顔には、まだ眠けがのこっている。中年すぎの社員の顔には、一日の勤勞がはじまらない先に既に疲勞と倦怠がある。のんきそうな釣服姿の白井さんにあつまる視線におのずから針がふくまれてくるのも無理はない。こっちは小さくなっているつもりでも、朝っぱらから大きな顔をした高等遊民に見えることだらう。

白井さんはバスが駅につくまで、ゆれる天井をながめながらがまんした。改札口を出て、ブラットホームの階段を

のぼったとき、はじめて気が楽になった。ホームの雑沓の中に、釣服姿の仲間が三人ほど見つかったからだ。

七時十五分発久里浜行は通勤列車だが、同時に釣列車でもある。平日でも東京や横浜から乗りこんだ釣師の姿を五人や十人は乗せている。日曜以外に休日をもっている勤勞者はまだ少なくない。たとえば、床屋さんは火曜日、バスの運転手君や放送局員や新聞記者は不定期の休日を待ちかねて、釣道具を肩にする。

白井さんはホームにいる釣師の顔を遠くから注意して眺めたが、角田君のいう社長らしい人物はいなかった。同じ鎌倉の釣仲間で、先方はこっちを知っているというのだから、会えばわかるはずだが。

社長ともなれば、通勤列車には乗らないだろう。自家用車とせば、鎌倉と久里浜は四十分距離だ。今ごろは久里浜について、舟に乗りこんでいるかもしれない。

そのほうがありがたい。ゴルフなら相手がいるが、釣はひとりのほうがいい。相手は海と魚だけでたくさんだ。人間同士の交渉はなるべく避けたいものだ。……

ところが、発車まぎわになつて、白井さんの孤独趣味は簡単に打ちやぶられてしまった。発車のベルが鳴りはじめた時、派手な釣服姿の一组がホームの階段をかけあがってきた。熱帯魚みたいなダンダラ模様の釣服をきた美少女とアゴの四角な目つきの鋭い老紳士であった。

老紳士は釣竿のケースを軍刀のようにふりあげて叫んだ。

「やあ、白井君、きみもかー」

東光精密電機株式会社の利光剛造社長である。角田君の社長というのはい、この人だったのか！

＊

釣にこる人は、ひどくふとっているか、ひどくやせているか、どっちかだという説がある。どんな生理学的根拠があるのかは知らぬが、当っているような気もする。

白井さんはふとり型で、利光氏はやせ型だ。乾しかためたような筋肉が全身に露出していて、七十近い老齢にもかかわらず、精悍の気を発散している。クルミの実みたいに皺の深い顔の猛禽性の目には非妥協と残酷性を思わせる冷たい光があつて、いかにも百戦練磨の老將軍、独裁社長らしい風貌だ。

ふとり型は陽気で、やせ型は気むずかしいということになっているが、今日の利光氏はめずらしく陽気であつた。「やあやあ、間にあつたな。幸先きがいいぞ、はつはつは」

つれの美少女をせきたて、ついでに白井さんまで、一等車のドアの中におしこんでしまった。

白井さんは釣に行くときには、一等車には乗らない。こゝとわつてもよかつたのだが、時間がなかつた。成行きにまかせることにして、ガラあきの一等車の座席に、ごきげんの実業家と向かいあつて腰をおろした。美少女は通路をへだてた座席にひとりですわつた。白井さんをさけているよ

うな目の色であつた。

「マコと言うんだ」利光氏は大声で紹介した。「娘だ。わしの末娘だ。車で行くつもりだったが、これが無免許運転でぶちこわしたんでね。あわてたよ、今朝は」

孫娘といつても通用しそうだ。利光氏は六十代で、娘はまだ十代に見える。

白井さんが軽く頭をさげると、娘はかすかに赤くなつて、窓の外に視線をそらした。まるで怒つたような横顔であつた。

しかし、美人だな、と白井さんは思った。友子は小柄で丸ぼちゃだが、この娘は大柄で、顔は下ぶくれの細面、全身の線が浮世絵風に軟かい。派手な化粧と服装も手伝つて、娘のくせに、へんに色っぽいところがある。もしかすると、老いてますます盛んらしい老人が、新橋か赤坂の若い妓にうませた「末娘」で、つまり、その母親の職業的色彩をそのまま受けついでいるのかもしれない。

だが、他人のことだ。よけいな詮索はやめよう。

「お嬢さんが釣に行かれるのは愉快ですね」白井さんは友子のことを思いだしながら言つた。「ぼくの娘もつれて行つてくれとだをこねて、今朝も家内にしかられたところですがね。こんなお仲間がいるのだったら、つれてくれればよかつた。ちようど、お宅のお嬢さんと同じ年ごろで……」

「十九か？」

「いや、まだ高校生で、十七歳と何ヵ月……」

「昔なら十九だ。うちのマコも満では十八にならないが、結構一人前だ」そして、利光氏はおだやかならぬ意見をつけ加えた。「すでに充分に情事を解するという意味だ。警戒を要する。いつとび出すかわからんので、釣にでもつれて行って、エネルギーを消耗させてやろうと思っている」

白井さんはちょっと度胆をぬかれた形で令嬢のほうを見た。マコという名の美少女は、窓の外を眺め入っていて、こっちの会話は耳に入らなかったようであった。

白井さんは苦笑して、

「お嬢さんは釣が好きなのではないのですか？」

「まだ、わからん。今日が処女航海だ。いやだと言うから、思いきり派手な服をつくってやったら、やっと承知したよ。やっぱり女だね。はっはっは」

独裁的な笑い声だ。髪は白いが、目つきは鋭い。

白井さんは、釣仲間のゴシップになっているこの老実業家の、独裁者的な釣の逸話をいくつか思い出した。

まだ戦争中のことだ。利光氏は房州に釣に行ったが、風が強すぎて釣舟を出せない。

「よし、出せないや、出せるようにしてみせる」

利光氏が浦賀に電話をかけると、一時間もたたぬうちに五千トン級の貨物船がやってきて、沖合に碇をおろした。利光氏はその船の風下に釣舟をとめて、ゆうゆうとペラとカサゴを釣った。

「横須賀から巡洋艦でも呼べば、タイも釣れたろうが、戦争中だから、おれの持ち船でがまんしたんだ」

そのころ、鎌倉の海岸に海の釣堀というのがあった。キスやアジの小物から赤ダイやスズキの大物まで、竿と浮木で釣れるので人気があり、わざわざ東京から通ってくる定連も多く、特に土曜日曜はお祭のようににぎわった。

利光氏も熱をあげた一人だったが、その釣りかたが変わっていた。お供の社員のほかに御殿女中風に盛装させた美人女中たちをひきつれ、総勢十人あまりが釣堀の片がわを占領してしまう。そのまんなかあたりに、花ござと緋の毛氈をしいて、御大がどっかと鎮座する。

女中と社員たちに酒や肴をサービスさせながら、殿様然とお釣りあそびするのだが、このお大名、釣れなくなると、家来だけでなく、ほかの釣客までとなりつけるので、釣堀中の鼻つまみになった。彼の姿を見ただけで釣竿をおさめて帰ってしまう客もある。

釣堀のおやじが骨のある男だったので、

「ここは、あんたのためにつくった釣堀じゃないんだ。お客さまはあんたの社員でも家来でもないんだから、殿様気取りはやめていただきましょう」

「なんだと？ 遊覧施設の従業員のくせに、さし出がましいやつだ。おれは社員の分も女中の分もちゃんと一人前の料金をはらっている」

「釣堀は釣りにくるところで、いばりにくるところじゃない」

「生意気な口をきくと、今後、お出入りをさし止めるぞ」
「お出入りさしとめはこっちの言うことだ。さあ、とっと

と出て行け！ 行かぬと釣竿をへしおって、お前もいっしょに堀の中にたたきこむぞ！」

「おもしろい、やってみろ、おれの剣道三段を知らないか」

「わしは観海流水泳の免許皆伝だ、勝負なら水の中ではない！」

おどろいた社員たちが仲に入って、水中の立ちまわりだけはくいとめたが、

「おい、社長の殿様、おぼえておくがよい。ここは公衆の娯楽場だ。いばりたかったら、自家用の釣堀でもつくって、ひとりできれば。わしはそこまで干渉せぬ」

釣堀のおやじの売り言葉を、即座に買いとって、

「よし、自家用の釣堀をつくってみせるから、出来たら貴様も釣りに来い。天下の利光剛造をお出入りさしとめにした度胸に免じて、入場料はただにしてやる」

利光氏は言いだしたことは実行する。大仏の裏山に、大きな池のある古別荘と広大な土地を買占め、十和田湖のヒメマスと琵琶湖のヘラブナとコイを飛行機で運ばせて自家用の釣堀をつくった。だが、ヒメマスは水にあわずに死に絶えたし、フナとコイはひとりでいくら釣ってもいばるわけにはいかなないので、すぐにあきた。池も屋敷も荒れるがままにまかせて、釣仲間の笑い物になっていたその土地が戦後の土地ブームで何百倍の高値を呼んで、社長追放解除後の東光電機再建の資金になったというのだから、ころんでもただでは起きない老人である。

今もつばら沖釣りにこっているらしい。葉山にも久里浜にも自家用の釣船がおいてあるはずだ。

果して、久里浜の駅に近づいた時、利光氏は言いだした。

「きみ、よかったらぼくの船に乗らないか。久しぶりだ」

白井さんは、あわてて答えた。

「ぼくは乗合ですよ」

「乗合？ よせよ、あれは車夫馬丁の乗るものだ」

「車夫馬丁ですか、はっはっは、古風で、いい言葉だ」

「きみも小説家なら社長級だ。苦勞して乗合に乗って船賃を節約することはなからう。いや、同じ節約するのなら、ぼくの船に乗れよ。料金はただだ」

これだから、いくらただでも利光氏の船には乗りたくない。うっかり乗ったら、一日中、家来あつかいにされて、釣りの楽しみもなにもあったものではない。

「ぼくは近ごろ、乗合船の楽しみを発見したのですよ。いろいろな職業と性格の人が乗っているのです……」

「ふん、小説の種とりか」

「釣りに出る時には、仕事のことは考えないことにしています。……乗合には乗合の仁義みたいなものがありましてね。案外、おたがいには妨げあいせん」

あなたのような殿様はいませんと言いたかったが、やめにした。

「それに、思いがけない名人が乗っていることがあるのですよ。かくれたる街の名人ですね。眺めているだけで、釣りかたや仕掛けの作りかたを教えられますね。船頭の腕に

頼らず、自分の釣った獲物だけをもって帰るのも楽しいものですよ」

「ぼくが船頭に釣らせてもって帰ると言いたいのか？」

「そんなことは言いませんよ。とにかく、船宿に電話もかけてありますから、今日は失礼して……」

「よせよ。きみにぜひ見てもらいたいものももって来てるんだ。新兵器だよ、きみ」

「また新兵器ですか」

新しい釣道具のことだ。

利光氏はもともと技術畑の出身で、東光電機も自分の発明した精密機械の製作によって発展した会社だ。発明家としては天才的な一面があるらしい。戦争中は航空機用計器の製作で、軍部と関係が深かった。中年をすぎると、発明のほうはやめたようだが、釣にこるようになってからは、ちよつと素人の思いつかない釣道具を製作しては、新兵器と称して釣仲間をおどろかせ、ひとりで喜んでゐる。

釣堀時代には、シグナル浮木というのを発明した。葉巻ほどの大きさのジュラルミン製の浮木が水の上に浮いていて、小さな魚がひくと青い旗、大きな魚がひくと赤い旗がひょこりと立つ。大きすぎて実用的ではなかったが、たいへん愛嬌があった。

今日の新兵器というのはなんだろう？

「船頭にわたしであるから、行ってみればわかるよ。実はレーダーなんだ」

「レーダー？」

「うん、魚群探知機さ」

得意そうである。

白井さんはその得意顔に水をかけるつもりで、

「レーダーなら珍しくありませんね。漁業組合の漁船はたいてい使っていますよ」

「ぼくのは携帯用だ。トランジスターだよ。どこへでもぶらさげて行ける新兵器だ」

「結構ですね」

白井さんは気乗りのしない返事をした。

君子は網せず、釣師は漁師にあらずというのが白井さんのモットーだ。釣師が大量漁獲を狙ったのでは漁師との区別がなくなる。獲物の数を自慢しあうこともなるべく避けたい。釣の方法も古風なほうが趣きがある。戦争じやあるまいし、レーダーまで持ち出して、逃げまわる魚を追いまわすようになっては、おしまいだ。

だが、利光氏は相手の気持をくみとったり、人の意見に耳をかたむけたりするような小人物ではない。他人の気持と意見は尊重するよりも無視するほうが手とり早いことを知っている大人物だ。

「さあ、終点だ。白井君。マコの荷物を持ってやってくれ」
行くものときめてしまった上に、早くも下男あつかいである。

「だ、だめですよ。乗合の船頭がわざわざ席をあけて待ってくれているし、ぼくは、レ、レーダーなんか……」

どもりながら、白井さんが抗議しかけたとき、マコとい